

京都大学教育研究振興財団助成事業
成 果 報 告 書

平成28年8月26日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団

会 長 辻 井 昭 雄 様

所属部局 総合博物館

職 名 教授

氏 名 本 川 雅 治

助成の種類	平成28年度・研究者交流支援・外国人研究者招へい助成		
招へいした研究者	所属・職名	国立台湾大学生命科学学院・教授	
	氏 名	Hon-Tsen YU	
研究課題名	台湾における生物学の興隆と史的展開		
招へい期間	平成28年6月27日 ～ 平成28年8月11日		
招へい成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input type="checkbox"/> 無 <input checked="" type="checkbox"/> 有(セミナー開催案内3部)		
会計報告	交付を受けた助成金額	450,000 円	
	使用した助成金額	450,000 円	
	返納すべき助成金額	0 円	
	助成金の使途内訳	往復航空券	57,000円
		国内交通費	47,000円
		宿泊費	298,000円
日当		48,000円	
当財団の助成について	(今回の助成に対する感想、今後の助成に望むこと等お書き下さい。助成事業の参考にさせていただきます。) 招へい研究者と資料調査、文献読解、聞き込み調査などを共同して進め、研究内容について十分に議論することができ、研究の大きな進展を得ることができました。貴重な機会を与えていただいたことに感謝しながら、引き続き研究成果のとりまとめを進めています。		

成果の概要／本川雅治

本事業では国立台湾大学の Hon-Tsen Yu 教授を総合博物館に招へいし、教授の本川雅治と、「台湾における生物学の興隆と史的展開」に関する共同研究を行った。台湾における動物や植物に関する研究は 19 世紀にヨーロッパの研究者によって始められる。航海技術が発達し、台湾を含むアジア各国から動物や植物の標本を収集し、ヨーロッパの自国に持ち帰って新種記載が行われるようになった。その後、1895 年に日本が台湾を統治するようになり、1945 年の第二次世界大戦の終戦までの 50 年間、日本人による動物や植物の研究が行われた。これらは日本本土から台湾を訪れて、標本を採集し、持ち帰っての研究だけでなく、台湾に生物学の研究拠点を作り、台湾での生物学の興隆や発展も進められた。

本事業に先だって、数年前から招へい研究者と受入研究者は、日本統治時代の 1928 年に設立された台北帝国大学の動物学講座に着目して、現存する当時の標本資料をもとに、台北帝国大学の動物学研究の解明を進めてきた。一方で、台北帝国大学の存在は台湾の日本統治期間の最後の約 3 分の 1 にすぎず、帝国大学創立以前の台湾における生物学研究の歴史についての解明を進めたいと考えるようになった。本招へいでは、こうした台湾における生物学の興隆と史的展開を明らかにするための資料調査を行った。

2016 年 6 月 27 日に京都大学に到着した後、6 月 29 日～7 月 4 日まで北海道大学に滞在した。6 月 29 日には 20 世紀はじめの台湾の自然科学研究者に焦点を当てた日本本土と台湾の研究交流に関する研究会を開催し、北海道大学の関連する研究者との情報交換の場をもった（添付資料 1）。北海道大学を訪問したのは、日本統治下の台湾での生物学関連の研究所や試験場における研究者や技師の多くが北海道帝国大学あるいは札幌農学校出身であることがわかっていたからである。北海道帝国大学や札幌農学校と、台湾との人的交流や関わりについて資料調査を行った。詳細は研究成果としてまとめる予定であるが、文献に加えて、手紙、写真、標本などの関連資料について北海道大学文書館、北海道大学総合博物館、北海道大学植物園博物館、北海道大学図書館において調査を行った。その過程で、台湾の生物学の発展において台湾博物学会の貢献が大きく、またそれが札幌博物学会の影響を大きく受けていることがわかった。台北帝国大学は植民地における帝国大学ととらえられることが多いが、設立時期は北海道帝国大学をはじめとして他の帝国大学に比べても著しく遅れているわけではない。本調査によって、台北帝国大学についても日本の帝国大学設立の歴史的流れの中でとらえることが重要であり、その前の研究所や試験場についても、国内の同様の機関、また札幌農学校などの展開とあわせてとらえる必要があると考えられた。札幌滞在中に、札幌農学校や北海道帝国大学の歴史資料についても調査し、台湾統治とも密接に

関わったであろう北海道開拓について知るために北海道博物館も訪問した。また、北海道大学では招へい研究者が専門とする進化遺伝学に関する研究セミナーも開催し、生物学が専門の研究者や大学院生との研究交流を行った（添付資料2）。

その後は京都大学総合博物館において資料調査を行った。台湾博物学会の重要性が見えてきたので、その機関誌である台湾博物学会報全て（1911年～終戦まで）の掲載記事の分析を共同して行った。その中の重要人物については札幌農学校や北海道帝国大学との関わりも含めて、人脈についての分析も行った。また、京都に在住する台北帝国大学動物学講座の教員のご子息を訪問し、終戦前後の台北帝国大学や動物学講座の状況についてのインタビューを行い、現存する関連資料を調査した。京都大学総合博物館では、博物館に関わる資料の意義についてのセミナー講演も行った（添付資料3）。総合博物館では生物学はもちろんであるが、文化史やアーカイブ学を専門とする教員や研究者も所属しており、セミナーをきっかけにして台湾の生物学研究史に関する多方面からの情報を得るとともに、有意義な議論を展開することができた。また、受入研究者が研究指導している理学研究科生物科学専攻の大学院生にとっては、今回のテーマである生物学の史的展開について興味をもつ有意義な機会となるとともに、招へい研究者が専門とする進化遺伝学についての最先端の研究成果に触れることができた。

今回の46日間の招へいでは、当初の想定を上回る知見を得ることができ、その成果を論文としてまとめる作業を継続して進めている。最後に招へい経費を助成していただいた京都大学教育研究振興財団、および研究実施に協力していただいた北海道大学および京都大学の先生方に心より感謝いたします。